

訓読語とその由来

漢文訓読は平安時代にその方法が確立したが、同じ平安時代の言葉でも、『源氏物語』や『枕草子』などの古文(ここでは和文言葉の作品をさしていう)とは、使う単語や語法が違って、両者は住み分けをしていた。訓読に使う単語や語法を「訓読語」と呼ぶ。

たとえば、『源氏物語』の冒頭の一段に「女御、更衣あまたさぶらひ給たまひけるなかに」と出てくるが、漢文訓読では「あまた」も「さぶらふ」も使われない。「あまたさぶらふ」をしいて訓読語で言えば「有ることはなほだ多し」のようになろう。逆に、『源氏物語』全巻に「はなはだ」の語は、儒者のセリフとして三回出てくるが、ほかにはまったく使われない。

古文と訓読語とはそのような住み分けをしていたので、古文の学習だけでは訓読語の世界になじみがないのは当然で、その結果、漢文は変なものだと敬遠することになる。

ここでは訓読語が、実は奈良時代の言葉のなごりであって、古文の言葉のちに死語になっても、漢文を通じて現代まで伝わってきたことを解説した。少しでもなじんで敬遠しないようにしていただきたい。

用例は主として『論語』の後藤芝山シヤン(江戸中期の儒学者)の訓点を用いたが、そのために本書の本文の訓読とは多少異なる場合がある。

1 「あした」「ゆふべ」

例1 朝あしたに道を聞かば、夕ゆふべに死すとも可なり(朝、真理とは何かを

聞けたなら、私は夕方に死んでもかまわない)(論語・里仁)

訓読に限らず、古文でも漢文でも「朝」「夕」を現代語のように「あさ」「ゆふ(ゆう)」と読むのは、「朝霧」あさぎり「夕霧」ゆふぎり」のように合成語の時に限る。単独で使用する場合は「朝」あした「夕」ゆふべ(ゆうべ)と読む。現代日本語の「あさ」「ゆう」は、「あした」が「翌日」、「ゆふべ」が「昨夜」を意味するように変わってしまったので、かつての合成語用の「あさ」「ゆふ」が取って代わり、単独使用になって現代に残っているもの

である。

2 「あたはず」「よく」

例2 知チに及べども、仁ニを守ること能あたはずれば、之を得ると

雖レも、必ず之を失ふ(知恵が民に及んでも、仁徳でもって民を守る事ができなければ、民を支配したとしても、必ず民は離反する)(論語・衛霊公)

「守れない」という不可能を表わす場合、古文では「え守らず」「守りあはず(あえず)」となるが、訓読では「あたはず(あたわず)」を使う。平安中期までは「守る+こと+あたはず」のように「こと」をともなったが、平安中期以後は連体形に直接つけて「守る+あたはず」のようにも使う。

例3 能よくく礼讓を以もつて国を為おめんか、何か有らん。礼讓を以もつて国を

為むむること能あたはずれば、礼を如何かににせん(譲り合う心で国を治めることができるとすれば、どんな難しいことがあるうか。譲り合う心で国を治めることができないうとすれば、礼の制度があっても仕方がないものだ)(論語・里仁)

possibleの肯定を表わす場合は、古文では possibleの助動詞「る・らる」を使うが、漢文訓読では「能」を動詞句より先に「よく」と読んで表現する。可能と不可能の場合とは「能」の読み方が異なることに注意されたい。

もともと奈良平安時代から江戸末期まで、肯定形の「あたふ」は見当たらず、否定形の「あたはず」のみが見られた。奈良時代から否定専門の語形として「あたはず」が固定されていたといわれる。「あたふ」がたとえば「あたふ限り」でできる限り」のように肯定形として使われるのは明治時代になってからである。

「能はざれば」は否定の条件文を作るものであるが、「能はずんば」と読むこともある。

3 「あこ」

例4 仲尼チュニ、豈あに子シより賢まらんや(仲尼(孔子)がどうしてあな

たより優れていましょうか)(論語・子張)

「あに」は反語文に使われるもので、「なに」何の奈良時代の古形だと いわれる。「あに」の語頭にnがついて「なに」になった。奈良時代の「あに」には、①下に打消の言葉をとまなう「決して…(ない)」の意味用法と、②下に反語文をとまなう意味用法とがあったが、平安時代には②だけになっ てしまった。

「あに」が「なに」だとすると、「あに…や」「は」「なに(何)…や」「つまり現代日本語でいう「何で…なのか」ということである。本例では「仲尼は【何で】あなたより優れている【のか】」ということになる。

4 「いづく」

【例5】 沛公が安^{あやむ}にか在る(沛公はどこに在るか)(史記・項羽本紀) 場所を問う疑問詞は、奈良時代には「いづく(いずく)」を使ったが、平安時代には「いづく」「いづこ」を併用し、このうち「いづこ」が「いどこ」になり(『土佐日記』の「こやいどこ」など)、さらに後、「いどこ」の「い」が脱落して現代の「どこ」に発展した。

一方、訓読では奈良時代の「いづく」を使い続けてきた。訓読では「いづく」に「いづくにか」の形が多く、「いづくにか」は「いづくんか」、さらには後述「いづくんぞ」のように「ぞ」をつける形になった。「いづくんか」「いづくんぞ」は古文には使われず、漢文訓読専用である。

5 「いづくんぞ」

【例6】 焉^{いづんぞ}賢才を知りてこれを挙げん(どうやって才能あるものを見つけて推挙すればよいでしょう)(論語・子路)

「いづくんぞ(いずくんぞ)」の語形は、「いづくにぞ」の音便形であり、場所を問う機能を失って、本例のように「どうして」「どうやって」など方法を問う疑問の意、また反語(後述)、まれに願望の意で使われる。

【例7】 子曰^いはく「吾^{われ}れ未^{まだ}だ剛者を見ず」と。或^{ある}るひと対^{たて}へて曰^いはく「申^{まを}ねなり」と。子曰^いはく「根^ねや慾^{よく}なり、焉^{いづんぞ}剛を得ん」と(先生は「私は強剛を見たことがない」と言う、ある人が「申ねがそうです」と答えた。すると先生は「根は欲ばりだ、どう

して強剛になれるだろうか」と言った)(論語・公冶長)

古文では係助詞「…や(は)」「…か(は)」で表す反語文(「剛を得んや」は、訓読では「いづくんぞ」や前述の「あに」を使う。この場合「いづく」は場所を表す意は失われているが、「いづくんぞ剛を得ん」を語源的に考えると、「どこに剛を得る可能性がある」ということになる。

6 「いはく」

【例8】 子曰^いはく(子の曰はく)とも読まれる、学んで時にこれを習^しう(先生が言われた、学んで機会あることにおさらいをする)(論語・学而)

『論語』によく出てくる「子曰」、もとの中国語は「先生が(主語)おっしゃった(述語動詞)」であるが、訓読では「先生の(修飾語)おっしゃることには(お言葉は)…である」というふう読みかえる。

「曰はく(いわく)」「曰はく(のたまわく)」は名詞であって、動詞ではない(173ページ)訓読のための日本語文法補説7参照)。したがって、「子は曰はく」とは決して読まない。一方、古くは弟子の発言などは「有子^{しゅう}が曰はく」「子夏^かが曰はく」「曾子^{そう}が曰はく」のように「…がいはく」の形で読んだ(孔子)のたまはく」と、「弟子のなまがいはく」は区別されたが、後世、孔子・弟子の区別がなくなり、「の」が「も」省略された。この「が」も、主語を示す「が」ではなく連体修飾を示す「が」である(我が妹の「が」)。漢文を訓読で読むようになった奈良時代の終わりから平安初期には、「子の曰はく…:…といふ(子の言葉で…:…と言う)」と訓読したが、平安時代からは最後の「いふ」を省略して「…の曰はく…:…」になった。いづれにしても「いはく」を動詞と勘違いしてはいけない。

7 「いまだ」

【例9】 未^{まだ}だ学びずと曰^いふと雖^{いへ}も、吾^{われ}れは必ずこれを学びたりと謂^いはん(まだ学んではいないと云っても、私はその人を学んだと評価しましょう)(論語・学而)

現代日本語の「まだ」は平安時代の古文にすでに使われたが(『土佐日

記』まだ幼き童」など、漢文訓読では依然として「いまだ」を使い、古文と訓読の住み分けは厳密に守られた。ちなみに『源氏物語』に「いまだ」は使われない。

「いまだ」と読んでも、現代日本語の「まだ」の意味は軽く、ただ「ない」の意味で使われることが少なくない。

例10 上みかを犯なすことを好すまずして乱みだをなすことを好すむものは、未まだだこれ有あらざるなり(目上めじやうにさからうことが嫌きらいで乱みだをおこすのが好きなものは、決していない)(論語・学而)

この文脈の原文「未之有」では「未」に「まだ」の意味は軽く、しかも目的語「之」が倒置された否定の強調として使われたと考えてよい。

8 「かうべ」

例11 項王けいおうの頭かぶを持ちて魯ろに視みめす(項羽けいゆうの首くびを手てに持もつて魯国ろこくの人々ひとに示しした)(史記・項羽本紀)

「あたま」という語は平安時代から存在したが、その意味は「ひよめき」つまり幼児の前頭部であった。平安時代の頭部は、古文では「かしら」、訓読では「かうべ(こうべ)」が使われ、住み分けが行われた。室町時代から江戸初期に次第に「あたま」が頭部全体を意味するようになって現代に伝わる。漢文訓読では平安時代の読みを伝えて「かうべ」と読むのが普通である。

9 「かくのごとし」

例12 子こ川のうへに在あつて曰いははく、逝ゆく者は斯かくくの如ごときか、昼ひる夜よを舍あらず(先生せんせいは川岸かわぎしに立たつて言いわれた、流ながれ去さるものはことうようなものか、昼夜じつやの別わかりがないのだ)(論語・子罕)

「このようだ」にあたる訓読語に「かくのごとし」を使う。漢文原文の「如(若)此(如)若(是)如(若)斯(如)若(之)」などにあてられる。「かく」にあたる漢字は「此」「是」「斯」「之」などで、「ごとし」にあたる漢字は「如」「若」などで表記される。

「かくのごとし」の語構成は「かく(副詞)+の(助詞)+ごとし(助動詞)」

というもの。「此」「是」「斯」「之」などの指示詞はふつう「これ」と訓読される。したがって「これのごとし」と読みそうであるが、代名詞「これ」ではなく副詞「かく」を使い(「か」自体も副詞で、代名詞ではない)、しかも「の」を介して「ごとし」に続けた。「かくのごとし」は語構成の成立を考証する適当な用例がなく、説得力のある成立論がない。漢文訓読をするときに考え出された語構成であることは確かであるものの、その由来については未詳である。

例13 子こ衛えいの靈公れいこうの無道むどうを言いふ、康子かうし曰いははく、夫それ是かくの如ごときらんば、奚いかぞ喪なしはざる(先生せんせいは衛の靈公れいこうの無道むどうを批判すると、康子かうしが「そもそもそんなふうであつたら、どうして失脚しつかくしないのですか」と尋ねた)(論語・憲問)

例14 定公問ていこうもんふ、一言いちげんにして以もつて国くにを興おこす可べきこと諸これれ有ありや、孔子こうし対たいかへて曰いははく、言げんは以もつて是かくの若ごとくなる可べからざるも、其そのれ幾かきなり(定公ていこうが「一言いちげんで国くにを盛さかんにできるものがあるだろうか」と聞くと、孔子こうしは「言葉というものはそのようなものではありえないのですが、まあ近いものはあります」と答えた)(論語・子路)

例13 は「如是」の例、**例14** は「若是」の例である。

10 「がへんず」「がへんぜず」

例15 先まづ坐まつ坐まつることを肯がへんぜず(先まに席せきに着かこうとししない)(遊あそ仙窟せんくわく)

「しようとししない」を意味する「がへんぜず(がえんぜず)」の形で使われる言葉であるが、この語の由来と展開は複雑である。

十二〜十三世紀書写の古辞書『類聚名義抄るいぎよせう』は「肯が」に「あへて・あふ・うけがへ・むべなふ・たへなり・きく・かぬ」の和訓を与え、「不肯ふけん」に「かへず・いなぶ・うけがへにせず」の和訓をあてる。十二世紀書写の古辞書『色葉字類抄しよくはつじゆ』は「肯が」に「がへんず」とあり、語例として「不肯ふけん」を掲げる。『類聚名義抄』の「かへず」は否定形の「不肯ふけん」の訓、「色葉字類抄」の「がへんず」は肯定形「肯が」の訓になっており、語義の肯定否定が逆転して

いる。

「かへんず」は「かへにす」の音便形であるが、その語構成は、下二段動詞「かふ」の未然形「かへ」＋否定の助動詞「ず」の連用形「に」＋動詞「す」だという説が有力である。つまり否定の「不肯」が「かへず・かへにす」がへんず」だったのである。

『類聚名義抄』の「かへず」が平安時代の「不肯」にあてられた例は次のようなものである。

〔例16〕 兵を去す^て肯^かへ不^ず〔武器をすてようとしなかった〕(史記・呂后本紀 古占)

「不」を「ず」と読んでいる。『類聚名義抄』が書写された時代は『色葉字類抄』よりも新しいが、内容はむしろ古いものを伝えている。

「不肯」を「かへにす」と読んだ例には以下のようなものがあり、「不」を「に」と読んでいる。

〔例17〕 大乘を修^つし肯^かへ不^にするを見て〔大乘仏教を修めたがらないのを見て〕(妙法蓮華經)

この「かへにす」が『色葉字類抄』に見えるように「かへんず」という語形になった平安末期から鎌倉時代になると否定を含んでいることが忘れられてしまい、肯定形の「肯」の訓になったものと考えられる。そこで否定の「不肯」には「かへんぜ」＋「ず」のように、改めてもう一つ否定の助動詞「ず」をつけた語形に変化した。それが〔例15〕の読み方である。

なお、清音「かへにす」が濁音が「かへんず」になったのは、もとは動詞連用形に「かへにす」が直接つき、〔例15〕の「坐^る」のことを肯^かへんぜ^ずも、古い訓読では「坐^る肯^かへんぜ^ず」であったが、こういう連用形接続で連濁が生じたと言われている。それが「…ことをかへんぜず」と読むようになって濁音が残ったのである。

なお「不肯」は「かへんぜず」と読まず、「肯^かへて(あえて)…ず」と読むことも多く行われる。

11 「いんづ」

〔例18〕 政^{まつり}をすするに、徳をもつてすれば、譬^{たと}は北辰^{ホク}の其^{その}の所に

居て、衆星のこれに共^あふが如^{ごと}し〔仁徳でもって政治を行えば、北極星が定位置に居て、星々がそれに向かうようなものだ〕(論語・為政)

「ようなものである」にあたる漢字は、「如」「若」「猶(なほ…ごとし)」「似」などであり、訓読では「ごとし」と読む。「ごとし」は奈良時代からあるが、平安時代になると、訓読と和歌とでは「ごとし」、古文では特殊な文脈以外は「ごと(語幹のみ)」「やうなり」を使い、住み分けがなされた。

「ごとし」は短い語形であるが、そもそも素性がよく分からない複雑な語で、品詞も助動詞説と形容詞説とがある。語源は「同じ」という意味の「こと」に「し」がついたものらしいが、確実な説ではない。接続は①活用語の連体形、②助詞「が」のにつく。また活用形に未然形はない。

推量・意志の助動詞「む」につなげるときはラ変動詞「あり」を入れ、「ごとく＋あら＋む」となるが、これが縮約されて「ごとくむ」(…のようにしよう)といった。この語形は、一見、未然形「ごとけ」に「む」がついたように見えるが(そういう説もある)そうではないだろう。

「…のようであれば」のように仮定をしめす場合は、「ごとく＋は(連用形接続)」の形式であるが、これが後に「ごとくば」となり、さらに「ごとくんば」になった。かつて、この「ごとくんば」は「ごとく＋ば(未然形接続)」がもとの形で、したがって「ごとく」という未然形があったという説があったが、今は否定されている。

〔例19〕 子^シ曰^はく、由^ユが若^{ごと}きは、其^{その}の死を得^えじ〔先生が言われた、由(＝子路)のようなものは、普通の死に方はできない〕(論語・先進)

〔例20〕 子^シ曰^はく、回^イは、予^{われ}を視^みること猶^{なほ}は父のごとくなり、予^{われ}は視^みること猶^{なほ}ほ子のごとくすることを得^えず〔先生が言われた、回(＝顔淵)・早逝の弟子)は私を父のように見なしていたが、私は彼を子のように見なすことはできなかった〕(論語・先進)

〔例21〕 孔子 郷党に於^おいて恂恂^{シヨシヨ}如^{ごと}したり、言ふこと能^{あた}はざる者の似^{ごと}し〔孔子は郷里にあってはつつしみ深くして、ものが言え

ない人のようであった(論語・郷党)(「者のごとし」と読まず「者に似たる」と読むことがある)

例19は「若」の例、例20は「猶」の例、例21は「似」の例である。

12 「しかうして」「しかうしてのち」「しかるのち」

例22 君子は信ぜられて而しかして後にに其の民を勞らすす、未だ信ぜられざれば則すなち以もつて己おのを厲おのましむと為す(君子は民に信用されて、その後で民をこき使う。信用されていなければ民は自分たちを苦しめていると思うものだ)(論語・子張)

現代日本語「そのようにして」にあたる「しかうして(しこうして)」は「しかくして」の音便である。「それ」の意味の「しか」は訓読で使われ、古文では「さ」が使われて住み分けていた。

接続詞としての「而」字は、その前の語に「て」「で」を送り、「而」自体を不読にするのが普通であった。たとえば「学んで時にこれを習う」(論語・学而)の原文は「学而時習之」であるが、「而」は読んでいない。

ちなみに「而」は江戸期の候文の中で「改而」あらためて「決而」けつして「依而」よつて「の」のように「て」の表記に多用された。

例22は原文が熟す傾向のある「而後」であるので、「しかうしてのちに」と訓読するが、平安鎌倉時代の古い訓読では「信ぜられて後に」と読んで「而」は不読にした。

「而後」は後世「しかるのちに」になるが、『論語』に関する限り、現代の訓読でも「しかうしてのちに」が読み伝えられている。

13 「しかりしかうして」

例23 子游シウ 曰いはく、吾が友張や、能よくくし難がたしと為なす、然しかれども未だ仁ならずと「子游は、私の友人子張は、他人が及び難い能力を備えているとみなされている、しかしそれでも仁者だとは言えない、と言った」(論語・子張)(能くし難きを為す「できにくいことをやっつてのける」という読み方もある)

「然れども未だ仁ならず」の原文は「然而未仁」、この「然而」は逆接で、『論語』の訓読ではこの二字で「しかれども」と読む。「しかれども」のほか、この二字で「しかるに」と読むこともある。

順接の意味を持つ「然而」は中国古典のなかでは極めて少ない。次は順接の例。

例24 父在いますこと有れば則すなち礼然しかくす、然しかうして(而)衆父子の道を知る(君主の)父親が存命であれば儀礼は父のやるように執り行う、そのように執り行ってこそ民衆は父子の道というものを知るのだ(礼記・文王世子)

ただ、これも「しかりしかうして(しこうして)」ではなく「然」を「しかうして(しこうして)」と読んで「而」は読まない。

例25 士大夫は節に務め制に死して、然しかり而しかうして兵勁よくく…(士大夫という貴族たちは節制に努力し、職分に命をかける、それ

だからこそ兵士が強くなり…) (荀子・王霸)

幕末明治には「しかりしかうして」と読むことが行われていたらしい。久保天随の訓読はあまり古い伝統にこだわらない傾向があった。現代の訓読では「しかりしかうして」が普通に行われる。

14 「しかず」「しく」

例26 己おのに如ごとくしかざる者を友とすること無かれ(自分に及ばないひとを友人にははいけない)(論語・学而)

「及ぶ」意の四段動詞「しく」は『万葉集』にもある奈良時代の言葉であるが、平安時代の『源氏物語』では限られた文脈でしか使わなくなった。しかし、訓読では「しく」、また否定形の「しかず」が盛んに使われた。「不如…」は「…にしかず」と「に」を送って読む。

15 「しむ」

例27 子シ人と歌って善よければ、必ずこれを反かえさ使しめ、而しかうして

後にこれを和わす(先生は、人といっしよに歌をうたつて相手がうまければ、必ずくり返させて、その後で合唱した)(論語・述而)

使役は古文の場合、「かえさ(四段動詞未然形)＋せ」となるが、訓読では奈良時代に使役を表わした助動詞「しむ」を使う。訓読は平安時代に確立した方法だが、奈良時代の古い言葉を残した読み方をして、古文は「かえさす」、訓読は「かえさしむ」という住み分けをした。

例28 肉多しと雖いへも、食気キに勝た使しめず(肉は多くても、主食のご飯を超えさせない)(論語・郷党)

例28は否定の例で、「勝たせず」ではなく、「勝たしめず」になる。

16 「なかりせば」

例29 管仲カンチュウ微カウをかりせば、吾れ其それ髪を被かわり枉カジを左にせん(管仲がいなければ、我々は髪も切らず、襟を左前にして野蛮な暮らしをしていたに違いない)(論語・憲問)

「な(無・微)かりせば」は、「なし」の連用形「なかり」＋過去の助動詞「き」の未然形「せ」＋接続助詞「ば」という語形である。過去の助動詞は現代語の「た」にあたるので、「無かったならば」というように、仮定を表すのに使われる。「なかりせば」は漢文訓読だけでなく、古文でも用例は少なくない。「なかりせば」は「り」が促音便で「っ」になり、「なかつせば」になることもよくある。また、古文では仮定の「…せば」は「…まし」と呼応して使われるが、訓読では呼応しない。「世の中に絶えて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし」(伊勢物語)

17 「べけんや」

例30 鄙夫ヒビは与よとに君に事かう可べけんや(つまらない男は、いっしょに主君にお仕えすることなどできようか)(論語・陽貨)

「無けん」に使われる未然形の「け」は(173ページ)訓読のための日本語文法「2の(1)参照)、「可べし」の未然形を使った反語文「可べけんや」にもよく使われる。これも古文にはほとんどない。なお、「可べし」に接続する語は

終止形になる。

18 「ほつす」

例31 七十にして心の欲ほするところに従って矩かねを躐こへず(七十歳で心のままにふるまって、ルールを踏みはずさない)(論語・学而)

「欲ほす」は「ほつす」と読む。形容詞「欲しい」と動詞「欲ほる」は同根語である。「欲ほる」はその連用形「欲ほり」(古い資料に連用形以外の活用はほとんど見られない)にサ変動詞「す」がついて「欲ほりす」になり、それがさらに転じて「欲ほす」になった。「ほつす」の読みは、もともと漢文訓読に用いられたものが、そのまま現代日本語まで伝えられている。

例32 禘テ既に灌カして往ちのは、吾れこれを觀みることを欲ほせず(禘の祭で酒を地面にまく儀式がすんでしまうと、私はその祭りの先を見たいとは思わない)(論語・八佾)

「ほつす」の否定形は、サ変動詞「す」の未然形「せ」を使って「ほつせず」になる。「ほつさず」ではないことに注意。